
米花町より

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

米花町より

【Nコード】

N6386U

【作者名】

白波

【あらすじ】

遠い町への話の中でコナンと哀が去った後の米花町を舞台にした話です。遠い町へを読んでなくてもわかるようにしようと思います。また、遠い町へを読んでいた方がよりわかりやすいかと思います。また、あまり本編と深くかわりませんがオリキャラも登場します。

第1話突然の知らせ

いつもと変わらない日、歩美はランドセルを背負いいつも通り学校へ向かった。

毛利探偵事務所に行ってもコナンがいないので先に学校へ行ったのではないかと思い元太、光彦とともに学校へ向かった。しかし、学校へ行ってもコナンと哀がない。

「光彦君いないね…。コナン君と哀ちゃん…。」

「そうですねえ。風でもひいて休むんじゃないですか？」

そんな話をしていると小林先生が教室に入ってきた。

小林先生は教室に入ってきて来るなり

「皆さん、静かに。今日は少しお知らせがあります。」

と言いつつ間をおいてから

「江戸川コナン君と灰原哀さんが転校しました。」

と言った瞬間クラスがざわめきだした。

「あの二人が転校ですか。」

「そんな…。」

「先生！コナンと灰原はどここの小学校に転校したんですか？」

「はい、はい、みんな静かに！」

と小林先生が言うつと教室は静かになった。

「みんな突然のことで驚いたかもしれないけど、みんな二人の事忘れないであげてね。」

休み時間

「そんな…。二人が転校しちゃうなんて…。」

と歩美がうつむきながら言うつと光彦が

「突然でしたからね…。でも二人もさみしいんじゃないんですか…。」

「突然じゃなかったのかもしれない…。」

「どうしてですか？」

「だって、ほら、哀ちゃん言ってたでしょう…。ツバメのような渡り鳥は同じところにはいられないって…。あれが別れの言葉だったかもしれない…」

と歩美が言くと三人は少し黙ってしまった。

下校時間

元太、光彦、歩美の三人はいつもの家まで帰る道を歩いている。

「ねえ…。光彦君…」

「なんですか、歩美ちゃん？」

「またいつかでもいいからコナン君たちの新しい家にいけたらいいな…」

と歩美が言くと光彦は

「いつかまた、会えますよ…。それに二人は絶対に僕たちの事を忘れませんよ！」

「そうだよね…」

その後三人は特に事件に遭遇することもなくそれぞれの家にたどりつくのでした。

第1話突然の知らせ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

更新は週一回程度だと思います。

これからの展開もある程度考えていますのでこれからよろしく願います。

第2話大阪からの来訪者

今、東京駅に色黒の少年とポニーテルの少女が現れた。

「久しぶりのとうきょうやなー」

と少女が言うつと色黒の少年は

「せやな…。」

「はよ、蘭ちゃんやコナン君の行こ！」

「おい！ちよい、待て！！和葉！」

と言うつと色黒の少年は和葉と呼ばれたポニーテルの女の子を追って出口の方へ向かった。

米花町 毛利探偵事務所

「ただいまー。コナン君…。」

と言いつと蘭は家のドアを開けたがコナンはいなかった。

（事務所の方にいるのかしら？）

と思いつと階段を下つて事務所の方に行つたがそこにもいない。

（遊びに行つてゐるには遅いわね…。電話しようかしら…。）

と思いつと蘭はコナンの携帯に電話をすることにした。

携帯の呼び出し音が少しなつてやがてやんだ。コナンが電話に出たようだ。

「もしもしコナン君？」

と言うつとコナンは

「なつ、なに蘭ねいちゃん？」

と言つた。

「家に帰つてもコナン君がいないからどこ行つたのかなあつて電話したのよ。」

と言うつと何かを考えていたのか少し間をおいてから

「実はね蘭ねいちゃんが空手の合宿に行つてゐる間にお母さんが迎えに来たんだ…。それで突然だったもんだから蘭ねいちゃんやみんな

なにちゃんとさよならって言わずに引越しちゃったんだよ…。」
と言った。

「そうなんだ…。」

と言うとコナンは何かを感じ取ったのか何も言わない
「でもいつか会いに来てよね歩美ちゃん達や服部君達、佐藤さん達
だって会いたいはずだから…。」

と言うとコナンは

「わかったよ…。蘭ねいちゃん。それじゃあさよなら…。」

と言った。その声は心なしか妙にさびしげに聞こえた…。

（そうか…。コナン君引越しちゃったんだ…。これからさびしく
なるな…。）

と思っていると、玄関の呼び鈴の音がした。

（誰だろう?）

と思いながら玄関の扉を開けるとそこには色黒の少年とポニーテール
の少女が立っていた。

「久しぶりやな！蘭ちゃん！」

「服部君に和葉ちゃん！どうしたの？」

「ちよつと、くど…やなかったコナン君にちよつと用があつてな…。」

「

と言った。

「ごめんね…。コナン君お母さんに引き取られたみたいでないの
よ…。」

「えっ！コナン君おらへんの！」

と和葉が言うと言は少しうなずいた

「ほんまか！」

と言う平次は少し動揺しているようだった。

「それでくど…やなくてコナン君はどこに行つてしもつたんや？」

と平次が言うと蘭は

「そつえばそれを聞くの忘れてた…。」

と言った。

そこからコナンとの会話の内容を話した。
その後和葉と平次が泊まることになった。

（明日また、コナン君に電話かけてみようかな…。）
と蘭は思いながら深い眠りについた。

第2話大阪からの来訪者（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

もう少ししたら少年探偵団に活躍してもらうつもりです。

これからもよろしく願います。

第3話コナンの行方

平次と和葉が訪れた次の日

朝から蘭はコナンの携帯に電話をかけているが一向に出る気配がない。

「だめかー。」

と蘭が言っていると和葉が

「朝は忙しいわけやし…。なかなかでれんとちゃう？」

「いくらなんでももう10時だよ！」

と蘭が言っていると和葉は

「ほんまや…。それじゃあ、土曜日やし、どっか遊びに行ってもうて、携帯もつとらんやないの？」

と言った。それに対し蘭は

「コナン君は遊びに行くときもちゃんと携帯持って行って家に置いてあることなんてそんなになかったよ。」

と言つと、

「そやな…。くど…。やなかったコナン君は携帯置いてくことないしな…。」

と言いながら平次が起きてきた。

「平次！いつあまで寝とんの！10時やで！」

と和葉が言つと

「もうそんな時間かいな…。」

その後10分ほど二人の喧嘩は続いた

「まあまあ和葉ちゃんもそのぐらいに…。」

と蘭が言つた時

「こんにちはー！」

と言いながら少年探偵団の三人が事務所に入ってきた。

「歩美ちゃん、元太君、光彦君！どうしたの？」

と蘭が言つと歩美が

「コナン君の事なんだけど…。」

「ああ…。コナン君なら…」

引越したと蘭が言おうとすると歩美が

「コナン君の引越していつから決まってたの？」

と聞いた蘭が

「どういうこと？」

と聞くと

「実はね…」

と歩美は灰原の発言について話した。

「へえーそんなことを…」

と言うと少し間をおいて

「って哀ちゃんも引越しちゃったの！」

と言った。

「うん…。哀ちゃん、阿笠博士と一緒にどこかへ引越しちゃった

みたい…。」

と言うと蘭は

「そうなんだ…。」

と言った。その時

「それは何かにおうわね…。」

「園子いつの間に！」

いつからいたかはわからないが事務所のソファーに蘭の同級生の鈴木園子が座っていた。

「ちよつとね…。蘭に用事があつてきたんだけどそのガキンチョがなんか真剣そうに話していたからじゃましちや悪いかなーって思つて。」

「ところで園子お姉さん、におうつてどういうこと？」

と歩美が聞くと園子は

「ずばり！メガネのガキンチョとあの茶髪の子は多分同じ場所にいるわ…。」

「どうしてそう思うの？」

と歩美が言うつと

「探偵の勘よ！この推理クイーン園子様のね！」

この場にコナンと哀がいればコナンは「勘かよ…。」と呆れ、哀は「あなたも大変ね…。」とコナンを慰めているだろう…。あながち間違っていないのだが…。

同じころとある離島で島の案内をしてもらっていたメガネをかけた男の子がくしゃみをし茶髪の女の子が

「だれかがあなたの噂でもしているのかしら…。」

とその女の子は言い島の案内の続きを聞いていた。

第3話コナンの行方（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

園子の登場のしかたが雑ですいません…。

次回からはオリキャラが登場します。

これからよろしくお願いします。

第4話時草旅館へ行こう

コナンと哀が米花町からいなくなってから一週間が経った。

今、少年探偵団と自称少年探偵団顧問で帝丹小学校2年B組担任の
小林澄子先生は、とある山奥にある時草旅館に向かっていた。

「すごい霧！」

と言いながら歩美が窓の外を眺めている。

「ほんとね…。運転がし辛いわね…。」

「あそこ誰かいますよ！」

と光彦が言っていると小林先生は

「ちようどよかったわ！あの人に道を聞きましょう！」
と言った。

「やっぱり道に迷ったのかよ…。」

と言う元太の文句を無視して小林先生は車を止めその人に声をかけた
「すいません…。道に迷ってしまっ…。時草旅館への道わかりま
せんか？」

と言っているとその人は

「あなたも時草旅館に？私の車が壊れてしまっ…。娘も一緒に乗
せせてもらいませんか？」

「いいですよ。それで娘さんは？」

「ちよつと待つてもらいますか？」

と言っているとその人は先のほうに歩いて行き三分ほどで小学生ぐらいの
女の子を連れてきた。

「よろしく願います。」

と言いその人が車に乗るとその人は

「そういえば、自己紹介がまだでしたね…。私は黒川鈴菜くろかわ すずなと言いま
す。」

と言った。すると女の子が

「私、黒川くろかわすみれって言うの！8歳だよ！」

と言った。

「私は帝丹小学校で教師をしています小林澄子と言います。」

「俺は小嶋元太だ！」

「僕は円谷光彦です。」

「私は吉田歩美だよ！」

と四人はそれぞれ自己紹介した。

「ねえ、もしかしたて歩美ちゃんたちは帝丹小学校に通っているの？」

と言うすみれの問いかけにたいし

「そうですね。」

と光彦が答えると

「じゃあ三人は少年探偵団なんだね！」

とすみれが言うとき光彦は

「僕たちの事知ってるんですか！」

と言った。するとすみれは

「うん…。まあ…」

と答えると三人は

「俺たちも有名になったんだな！」

「そうですね！僕たちはいつも大活躍ですから！」

「もっと頑張らないと！」

（なんか今頃コナン君や灰原さんに聞いたなんて言えないな…。）

とすみれが思っているのも知らずに三人は勝手に盛り上がっている。

「そういうば、すみれちゃんどこの小学校に通っているの？」

と歩美が突然聞いた。すると、すみれは突然話しかけられたので驚きつつ

「私は、名端めいたんしょうがつこつ小学校に通っているんだよ！」

と答えた。歩美が

「そうなんだー。今度冬休みにでも遊びに行つていい？」

と聞くとすみれは

「うん！いいよね！ママ！」

と言った。鈴菜は

「いいわよ…。」

と答えるとすみれは

「それじゃあ、これ家の電話番号！時々電話してね！」
とメモ用紙に電話番号を書いて歩美に渡した。

第4話時草旅館へ行く（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回より少年探偵団が事件に遭遇します。

これからもよろしくお願いします。

第5話時草旅館殺人事件（事件編）

少年探偵団の三人と自称少年探偵団顧問の小林先生、偶然途中で出会った黒川親子の六人は時草旅館にいた。

「すごい！」

と歩美が言つと

「確かにすごい内装ですねー。とても高そうです。」

「高そうって、うな重何倍くらい食えるんだ？」

「元太君あんまり食べすぎるとブタさんになっちゃうよ！」

「ほんとに元太君はすぐにうな重の事を考えるんですから…。」

（阿笠博士に頼まれたとはいえ…せつかくの休日こんな遠くへ来ることになるとわ…。まっでもコナン君がいなしし事件に巻き込まれることもないからゆつくりできるかな…。）

と後で小林先生がそんなことを考えているのも知らず少年探偵団の三人はいつも通り結構はしゃいでいる。

そのあと小林先生と歩美は1号室、黒川親子は2号室、元太と光彦は3号室に泊まることになった。

3号室の前の廊下

今ここには元太、光彦、すみれ、小林先生の四人がいる

「元太君、光彦君、すみれちゃん少しこのあたり散歩しよう！」

「いいですねー。小林先生も一緒にどうですか？」

（そうね…せつかく来たんだしいいか…。）

「いいわね…。そうしましょ！」

と言つと小林先生は準備をするため部屋に戻った。

「私、お母さんに言ってきていいか聞いてくる！」

と言つとすみれは2号室へと入って行った。

十分後：

「さてと、出発よ！」

と小林先生が言々と三人は

「おー！」

と言い山荘の入り口に向かって歩き出した。

時草旅館 受付

そこには、旅館の若女将の時草千尋ときくさ ちひろと宿泊客らしき男性がいた。

「こんにちは…。予約してないんですけど…。」

「はい、よろしいですよ。何泊のご予定ですか？」

「1泊二日です。」

「かしこまりました。こちらの台帳にお名前をお願いします。」

と言つと男性は台帳に名前を書いた。

「ありがとうございます。それでは、中野様なかの、6号室へご案内いたします。」

と千尋が言つと中野は廊下の方へと歩いて行つた。

夕食の時間 大食堂

現在大食堂には中野を除く宿泊者全員がいた。

「浩美ひろみ、中野様をお呼びして、食事の時間だからー。」

と千尋が言つと浩美と呼ばれた女性は

「わかりました。」

と言つて大食堂を出て行つた。

その数分後…

「キャーーーーー！」

と言つ悲鳴が聞こえ元太たちが駆けつけるとそこには血を流して倒れている中野がいた。

第5話時草旅館殺人事件（事件編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

事件がついに起こってしまいました。

ですがトリックなどがまったく思いつかないのでトリック等まったくと言っていいほどがありませんのであまり期待しないでください。

これからもよろしくお願いします。

第6話時草旅館殺人事件（捜査編）

中野氏の遺体が発見されて約数分後：

「警察の人ここに来るまでの道で土砂崩れがあつたみたいでこれな
いって！」

とこの旅館の女将の千尋が告げた。すると少年探偵団の三人は
「だったら私たちが犯人を見つけましょう！」
と歩美が言つと

「コナン君や灰原さんがいないのにですか？」

「マジかよ！」

と光彦や元太が言つと歩美は

「マジだもん！」

と自信ありげに言つた。

「とにかく行こう！」

「ちよつと！みんな子供だけで犯人捜しなんて危ないから……。とり
あえずここで待機しましょう！」

というような小林先生の忠告も聞かず現場の方へ行ってしまった。

時草旅館 6号室

まだ、警察等が到着しないため、現場には中野氏の遺体はまだあ
つた。歩美は旅館の人に借りた手袋を元太、光彦、小林先生に渡す
と手袋をはめ現場検証を始めた。

中野氏の遺体は部屋の中央にあつた。歩美がコナンがやっていた
ように調べてみると頭に鈍器で殴られたような跡があつた。

「この人頭を重いもので殴られたから死んじゃったのかな？」

と歩美が言つと光彦は考えるようなポーズをとりながら

「そうですねー確かに頭に殴られたような跡があるからそうかし
れませんか……。」

「とにかく！死亡推定時刻とかはわからないから、この人が最後に

目撃された時から、発見されるまでの間アリバイのない人探そう！」
と言うと光彦が

「そうですね…いつも死亡推定時刻を調べていたのはコナン君や警察の人でしたからね…。」

と言った。そのあと三人はそれぞれ旅館にいる人に事情を聴いて回った。

30分後…

「どうだった？」

と歩美が聞くと光彦が

「中野氏が最後に目撃されたのは遺体が発見される約1時間前…部屋に入って行くのを仲居さんが見ていました。」
と報告した。

「それで、その間アリバイがないのは？」

「えっとですね…まずは、鈴菜さん、次に7号室に宿泊している山^{やま}川千穂^{かわちほ}さん、そして最後に10号室に宿泊している緑川正宗^{みどりがきさむね}さんの三人です。ちなみにほかの宿泊客の人たちは家族旅行等でアリバイがありました。」

「それじゃあ、3人に中野さんとどういう関係か聞いてみようか！」
と歩美が言うと光彦は

「そうですね！」

と答え今度は小林先生を引き連れ鈴菜さんに話を聞きに行くことにした。

第6話時草旅館殺人事件（捜査編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第7話時草旅館殺人事件（鈴菜編）

現場を出た歩美、光彦、元太、小林先生の四人はまずは黒川親子が宿泊している部屋に向かった。

時草旅館 2号室

「鈴菜さん、いますか？」

と小林先生が言つと

「はい、今出ます。」

と言いながら部屋から鈴菜が出てきた。

「あら…昼間の」

「こんばんわ…。実はその…。」

と小林先生が口ごもっている

「私たち少年探偵団だから今回の事件の事いろいろ聞きに来たの！」
と歩美が言つと鈴菜は

「探偵ごっこやってるの？いいわよ話ぐらい…。」

と言い四人を中に招き入れた。

「それで何が聞きたいの？小さな探偵さん…。」

と鈴菜が部屋に備え付けてある冷蔵庫からジュースを出しながら言う
と光彦が

「ありがとうございます。ところで鈴菜さん確か中野さんの部屋に
いつてますよね？いったい何のようで？」

と聞くと鈴菜は少し驚きながら

「あら…。ちゃんと調べているの…。私は中野君とは同級生で久
しぶりに会ったから、あいさつしに行ったのよ…。彼、同窓会にも
こなっかつたし…。」
と言った。

「ところで中野さんって誰かに恨まれているとか知らない？」

と歩美が聞くと鈴菜は

「そうね…。どういう関係か知らないけど中野君誰かとけんかしてたわ…。」

「誰かって？」

と歩美が聞くと鈴菜は首をかしげながら

「そうね…。確か中野君その人の事正宗って呼んでたわよ…。喧嘩の内容まではわからなかったけど…。」

そのあと四人は鈴菜に礼を言った後部屋を出ようとすると

「待って！歩美ちゃん！」

とすみれに呼び止められた

「なに、すみれちゃん？」

と歩美が振り返りながら言うすみれは

「私も探偵やってみたいんだけど、手伝わせてくれる？」

と顔の前で手を合わせ頼みごとをするようなポーズを取りながら言った。

「いいですか、鈴菜さん？」

と小林先生が聞くと鈴菜は

「危ないことしないならいいですよ…。」

と答えた。すみれは

「やったー！それじゃあ行ってくるね！」

と言うとすみれは勢いよく部屋を飛び出した。

時草旅館 廊下

「次はどこに行くの？」

と言うすみれの問に歩美は

「そうだなあ…。正宗さんのところ行こう！」

と言いながら10号室の方へ歩き出した。

第7話時草旅館殺人事件（鈴菜編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

章を作成しました。

これからもよろしくお願いします。

第8話時草旅館殺人事件（証言編）

時草旅館 10号室

今この部屋には少年探偵団の三人と小林先生、すみれそして正宗がいた。

「それで、お前たちは事件の事について聞きたいと。」

「はい…。」

と光彦が言つと正宗は

「何が聞きたい？」

と言いながら座布団座るようにながした

「その…。正宗さんは廊下で殺された中野さんとけんかしていたとか…。」

と言つと正宗は感心したような顔で

「もうそんなことまで調べているのか…ガキだからってあなどつちやいかな…。」

と言つと正宗は少し間をおいてから

「中野とは会社設立以来の仲で少し会社の方針でもめてたつていえば十分かな？」

と言った。

「そうですね…。」

と光彦が言つた後、礼を言いながら部屋を後にした。それに続きほかの四人も部屋を出た。

時草旅館 廊下

「最後は千穂さんですか…。」

と光彦が言つと向こうから千穂が歩いてきた。

「あつ！千穂さんですよ！」

と光彦が言つと千穂は五人を見て

「もしかしてあなた達が正宗が言つてた探偵さん達？」

「ええ…そうですね…」

と光彦が答えると千穂は

「話聞きに来たんでしょ！さっ大食堂にでも行きましょう！」
と言つと千穂は大食堂の方へ歩き出した。

時草旅館 大食堂

少年探偵団の三人と小林先生、すみれ、千穂の六人が大食堂の座布団に座ると

「千穂さん、中野さんとはどういう関係なの？」

と言つ歩美のと言つ質問に対し

「中野君とは正宗や雪菜^{ゆきな}さんと一緒に会社を設立したのよ…。中野商事と言つ会社でね…。ただ最近中野君と正宗が会社の経営についてすごいもめてて…」

「それは具体的に？」

「早い話お金の話よ…。詳しい内容まではわからないけど…」

「そうですねですか…。ところで最近中野さんとの関係は？」

と光彦が聞くと千穂は少し間をおいてから

「会社が大きくなったせいかな最近は前みたいにみんなで飲みに行くつてこともないわね…」

「そうなんだ…」

と歩美が言つと千穂は

「納得していただけた？探偵さん…」

と言つた。光彦は

「はい…。参考になりました…」

と言つと礼を言い部屋を後にした。

時草旅館 廊下

「さて…。動機があるとしたら正宗さんですね…。」
と光彦が言つた

「そついえばよー。凶器つてどこにあるんだ？」

「あーそういえば忘れてました！」

と光彦が言っと

「確かに現場には凶器は落ちてなかったわ…。」

「確かに元太君の言うとおりだよ！」

「ところで何を調べているの？」

と言っすみれの質問にずっとけながら光彦が説明を始めた。

五分後：

「とにかく正宗さんと千穂さんのカバンの中とかを見せてもらいま
しょう！」

と光彦が言っと五人は正宗の部屋に向かった。

第8話時草旅館殺人事件（証言編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第9話時草旅館殺人事件（解決編）

時草旅館 廊下

「さてと…それじゃあ正宗さんの荷物から見せてもらおうか…。」
と言いながら歩美が歩き出すとすみれが

「待つてよ!」

と言いながら歩き出し元太、光彦、小林先生もそれに続いた。

時草旅館 10号室

荷物を見せてほしいと頼むと正宗は

「これで全部だ!」

と言いながら着替えなどのほかに

カメラ

空のフィルムケース

脚が欠けた三脚

が出てきた。光彦が

「何でこの三脚欠けているんですか?」

と聞くと正宗は

「いや…ちよつと撮影中にね…。」

と言った。

五人は正宗に礼を言つと千穂の部屋に向かった。

時草旅館 7号室

「荷物を見せてほしいって?」

「はい…。」

と光彦が答えると千穂は

「少年探偵団だっけ…結構優秀なのね…でも、頭がよすぎると長生きしないわよ！」

と言うとカバンから拳銃を取り出し近くにいた歩美たちの方へ向けて

「拳銃こんなものなんて使ったらすぐにばれると思って直前に殴るだけにした

けど、まさか、嗅ぎ付けてくるとわね…なかなか優秀ね…ほんと…

冥土の土産に教えてあげるわ。あの男は雪菜を自殺させときながら償おうともしなかった。だから、殺したのよ！余分なことしなければ長生きできたのに…。」

と言い放った。

（どうしよう…探偵さんやりたいなんて言っただけいいけど…。）

と思いながらポケットの中を探っていると何かに手が当たった。

（これって…確か…。）

と思いながら千穂に気づかれないようにそれを出した。

（間違いない…確か使い方は…。）

数日前…

名端島 阿笠博士の家

「博士、話ってなに？」

とすみれが聞いた。

「哀君に聞いたんだが、今度、時草旅館に行くそうじゃないか…。」

「そうだけど…それが、どうかしたの？」

とすみれが聞くと阿笠博士はキャラクターが描かれたピンクの時計を持ってきて

「いや…その…どうかは無いんじやが、何かあった時のための護身用としてな…。」

と言いながらそれを渡した。

「護身用って？」

「つまり身を守るためのものと言うことじゃ…それはコナン君がつけているのを見た目は違うが、中身はほとんど同じじゃ…使い方は

…」

ということを出し。

（そうか！これなら！）

と思いながらすみれは時計型麻醉銃（女の子バージョン）から麻醉針を発射した。

プシュ！

という音が鳴り数秒後には千穂が倒れこんだ。

その後しばらくして、ようやく開通した道路を通過して来た長野県警の大和警部に身柄を引き渡した。

第9話時草旅館殺人事件（解決編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

夏休み中にこの章を終わらせたかったのでこちらにも投稿しました。

次回の時草旅館殺人事件（後日談）の後から新章に入る予定です。

これからもよろしくお願いします。

第10話時草旅館殺人事件（後日談）

名端島 すみれの家

すみれはいつも朝早く起きるため朝食までの間よく鈴菜と話している

「それにしてもすごいわね…あの子たち…事件を解決したんでしょっ？」

と鈴菜が言つとすみれは

「そうだね…本当にすごかったよ！」

と答えた。

「ところで、すみれは楽しかった？」

「うん！ちよつとドキドキしたけど…」

とすみれが答えると鈴菜は少し間をおいてから

「それなら今日学校に行ったらクラスの子を何人が誘つてすみれも少年探偵団やつたら？」

と言つた。

「いいの？」

「ええ…いいわよ…自分の好きなことをやるのは大切だもんね…」
「やったー！それじゃあ…。灰原さんでしょ！あと…」

一方その頃米花町では…

「しかし…まさか殺人事件に遭遇するとは…。」

と光彦が言つと歩美が

「そつだよね…コナン君いないのに…。」

と言つた。すると元太が

「もしかしたらコナンの事件吸収体質が移つたんじゃないか？」

と言つた。すると歩美が

「それならさ…誰か探偵さんに弟子入りしているいる学んだ方がいいのかな？」

と歩美が言つと光彦が

「そうですね…やっぱり身近にいる人で有名な探偵と言つと…。」
と言つと。三人は同時に

「毛利探偵！」

と言つた。

「それじゃあ、学校が終わつたら毛利探偵のところ行こう！」

と歩美が言つと光彦が

「そうしましょうか！」

と言つた。

放課後…

毛利探偵事務所

「すいません…毛利探偵いますか？」

と言いながら事務所に入ると蘭が

「ごめんね…今お父さん出かけちゃつてて…」

と言つた。

「調査かなんかですか？」

「そんなところかな…そんなことよりどうかしたの？お父さんによ
うだなんて…」

「実はですね…」

光彦が事情を説明し

「…ということで毛利探偵に弟子入りたいんです！」

と言つと蘭は

「なるほどね…でも、お父さんはやめた方が…」

と言つた。

「どうしてですか？」

「だってほら…コナン君いないし…事件の解決のためのヒント探す
のや推理の手伝いはほとんどコナン君がやつてたから…」

と言つた。

「つまり…コナン君抜きではあの推理ショウは成立しないんですか

？」

「そんなところかな…。」

と蘭が言うつと光彦は落胆した様子で

「そうですか…。」

と言った。

「平次お兄さんに頼むにしても大阪じゃあ遠いし…。」

と歩美が言った時

「誰か忘れてない？」

と事務所の奥から声がした。声がした方を向くとなぜかソファーに園子が腰かけていた。

「園子… いったいどこから…。」

と蘭が聞くと園子は

「いやね！その入り口で真剣そうに話してたからそこに窓からこのロープを使って入ったのよ！」

と言いながらロープを出した。

「そんなことしててよく警察に通報されなかったね…。」

と蘭が言うつと園子は

「そんなことより！探偵として修行したいらこの推理クイーン鈴木園子様のところに来なさい！」

と言った。すると三人は少し話し合ってから

「それじゃあ… よろしくお願いします…。」

と言った。

「私の指導は厳しいわよ！」

と言うつと園子は探偵団を引き連れて探偵事務所を後にした。

第10話時草旅館殺人事件（後日談）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章に突入します。

これからもよろしくお願いします。

第11話別れを告げる手紙

東京 米花町 歩美の家

「今度ねー蘭お姉さんたちと京都行くんだよ！」

と歩美が言くと歩美の母は

「良かったわね…そういうばこの前、先生や友達と一緒に行った旅行は楽しかった？」

と母に聞かれ歩美は

「楽しかったけど…コナン君がいないのに事件に巻き込まれっちゃって大変だったよ…。」

と言った。

「そうなの？」

「うん…。」

と歩美が言くと母は棚の中から封筒を出して

「歩美…これ、実はねあなたの友達に、もしも、事件にあうようなことがあれば渡してって、頼まれていたの…。」

と言いながら母が歩美に封筒に入った手紙を渡した。

（手紙？誰からだろう…。）

と思いながら手紙を受け取ると封筒には「吉田歩美様」と書かれているだけだった。

歩美が封筒を開けて中の手紙を取り出すとそれを読み始めた。

親愛なる吉田歩美様

あなたがこの手紙を読んでいるということは私はおそらく米花町にいないということですね…。

引っ越しについては夏休みの後半…入院している間に決まりました。

何も話さずに行ってしまったってごめんなさい…。

あなたの悲しむ顔が見たくなかったのかもしれませんが…。

米花町を引越すにあたって江戸川君も同時期に引越すと言っていたので彼もいないと思います。

彼がいなかったら事件に遭遇することもないのかもしれませんが、もしかしたら彼と長いこといたせいで彼の事件吸収体質が移っているかもしれません。

そんなときのためにこの手紙を書きました。

手紙を読んでいる途中で歩美は泣き出していた。
（哀ちゃん…何で前からわかっていたら教えてくれなかったの？もつと前に教えてくれたらよかったのに…。）

もしも…もしももう一度事件に巻き込まれるようなことがあったらこの手紙に同封してあるお守りを開けてください…。

おそらくこれであなたと連絡と取ることはないでしょう…。

理由は言えないけど私は本来あなた達の近くにいてはいけない人間です。

だから私の事は忘れて自分の人生を歩んでください…。

それでは永遠にさようなら…。

灰原哀

（どうしてなの？哀ちゃん…哀ちゃん頭が良くてかつこよくて、でも動物さんが大好きな優しい子なのになんで私たちに近くにいちやいけないの？哀ちゃんの事忘れるなんてできないよ！どうしてそんなさみしいこと言うの？）

歩美の目からあふれた涙がぽたぽたと手紙に落ちる

（もう一度会ってちゃんと別れと今までいろいろ教えてくれたり助けてくれたことのお礼がしたいのに…「やっぱりさみしくなっちゃった」とか言いながらもう一度会いに来てよ哀ちゃん…。）

と思いながら歩美は封筒の中に入っていたお守りを握りしめていた。

第11話別れを告げる手紙（後書き）

読んでいただきありがとうございます

今回から新章突入です。

これからもよろしく願います。

第12話京都駅から

京都駅 改札口付近

少年探偵団の三人と蘭、小五郎の五人は自称少年探偵団顧問の小林先生のところと毛利探偵事務所に届いた謎の依頼を調査するため京都へ来ていた。

「ついたねー。京都！」

と蘭が言ったとき

「あつ蘭ちゃんやないか！」

という声が聞こえてきた。五人が振り返るとそこには西の高校生探偵服部平次とその幼なじみ遠山和葉が立っていた。

「服部君に和葉ちゃんどうしてここに？」

「よーわからん暗号が家に届いてのーそれでわざわざ京都まで来たちゅーことや。」

「もしかして暗号ってこれ？」

と言いながら蘭が暗号が書かれた紙を出すと平次は

「それやそれ！えつと確かこのへんに……。」

と言いながらポケットを探り出した。

「あつ！あつたこれや！」

と言いながら平次は蘭が出したのと同じものを出した。

「とりあえず読んでみようよ！」

と歩美が言つと蘭が

「そうだね。」

と言つと文章を読みだした。その内容は京都へ来てほしいという内容と

高き舞台より飛び降りし時に見える滝を横目に塔へ進め

その後金の鹿と漆の寺へ行き民を安定させる雨乞いの池に行け

そして銀の慈悲に照らされ石の上で座禅せよ

最後に土佐の助けて大政奉還を実現せよ

さすれば謎が解けよう

蘭が手紙の内容を読み終えると

「お待ちしておりました皆様！」

と男の人に話しかけられた。

「なんや自分？」

と服部が聞くとその男は名刺を出しながら

「私は今回手紙を送らせていただいた東都テレビの川町と申します。かわまち

今回このような手紙を送らせていただいたのは当社の東西推理対決という番組で皆様に推理対決をしていただくためです。」

と言われると平次は納得したように

「なるほどな…。つまり俺たちが推理対決で誰が早くゴールに着くかつちゅーことか！」

「はい、その通りです。」

「俺らのほかにはだれかおるんか？」

「いえ…。あなた方だけです。ちなみに今回小林先生は欠席と言うことで子供たちの付添は蘭さんをお願いしたいんですが…。」

と言いながら川町は蘭の方を見た

「いいですよ！」

と蘭が答えると川町は

「ありがとうございます！」

と頭を下げてから

「それでは今回の企画のルールについて説明します。このゲームは毛利探偵所チーム、少年探偵団チーム、大阪高校生探偵チームの三チームに分かれて行います。なお他のチームの妨害が発覚した場合

その場で失格となります。制限時間は日が沈むまで、その他細かいルールはこの冊子に書いてあります。それでは皆様準備はよろしいでしょうか！」

と言われ全員が返事をしたのを確認すると

「それでは東西推理対決スタートです！」

と言う川町の声とともに七人はそれぞれ歩き出した。

第12話京都駅から（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第13話 高き舞台へ

スタートの合図とともに小五郎はどこかに向かい少年探偵団と蘭、平次、和葉の六人は、まだ、京都駅にいる。

少年探偵団チーム

「最初は高き舞台から…と言う文章ですよね…。」

「高き舞台ってどこだろう?」

「おいしいなぎ屋じゃねーのか!」

と元太がよだれを垂らしながら言うと言つと光彦はあきれながら

「そんなわけないじゃないですか…。」

と言つと蘭が

「高き舞台つて清水寺の事じゃない?」

と言つた。すると光彦が

「そうか!確かに清水の舞台は高いです!」

「それじゃあ清水寺の舞台から見える滝の方に行けばいいんじゃないの!」

と歩美が言つと

「きつとそうですよ!ひとまず清水寺に行きましょう!」

と言いながら光彦はバス停に歩き出した。

少年探偵団が清水寺に向かう少し前、同じような推理を展開した平次と和葉の二人は清水寺に向かうバスが来るバス停に着いた。しかし、二人がバス停に着いたときちょうどバスが発車してしまった。すると和葉が

「バス行つてしもつたな…。」

と息を切らせながら言つた。その後バスを待っているうちに少年探偵団と蘭が追いついたため一緒に清水寺に行くことにした。

清水寺

「ここが清水寺かいな！」

と和葉は清水寺の舞台に着くなり言った。

「そんなことよりもさっさと行くで！和葉！」

と言うつと清水寺の舞台から見える滝の方に向かおうとした。

「ちょー待ち！平次！」

と言いながら和葉は追いかけて行った。

そのすぐ後…

少年探偵団の三人と蘭は清水寺の舞台に着いた。

「すごい景色！蘭お姉さん、早く！早く！」

と言いながら歩美が手招きすると

「今いくわよ！」

と言いながら蘭が来た。すると蘭のそばにいた光彦が奥の柱の方を見て

「誰かに見られてませんか？僕たち…。」

と歩美たちに耳打ちした

「悪いことしないように俺たちの事見張ってるんじゃないのか？」

「そうだよ！光彦君！そんなことよりも早くそこに見える滝の方に
行こう！」

と言いながら歩美は元来た道を戻り始めた。

「そっちから行けるんですか？」

と光彦が聞くと歩美は立ち止まって

「多分こっちの方が近いって！」

と言うつとそのまま歩いて行ってしまった。

「待ってくださいよ！」

「待てよ！歩美！」

と言いながら残りの少年探偵団メンバーが追いかけて行きそのあとを
「しょうがないわねー。」

と言いながら蘭が追いかけて行った。

第13話 高き舞台へ（後書き）

読んでいただきありがとうございます

これからもよろしくお願いします。

第14話 滝と塔

京都 清水寺 音羽の滝

「清水寺の舞台から見える滝を横目にだから…歩美ちゃん、その地図で清水寺の舞台から逆の方に何か塔とかない？」

と聞くと歩美は地図を見つめ

「あつたよ！子安塔って言うところがあっちの方にあるみたい！」

と言いながら歩美は歩き出した。

「待ってくださいよ！歩美ちゃん！」

と言いながら光彦が歩き出すと残りの二人もそれに続くように歩いて行った。

京都 清水寺 子安塔

「これが、子安塔ですか…。」

と光彦が子安塔を見ていると元太が

「あそこにいるおっさん何か持つてるぞ！」

と言った。その人に近づくと

「君たちは少年探偵団チームだね！今君たちが一位だ！この調子でがんばれ！」

と言いながら「清水寺」と書かれたカードを蘭に渡した。

「ありがとうございます！」

と蘭が言つと少年探偵団は次の暗号を解き始めた。

そのころ平次と和葉は…

音羽の滝の前で喧嘩をしていた

「だから！ここに書いたる塔ってのはそっちにある三重塔にきまつるやろ！」

「んなわけあるかい！あっちの子安塔に決まっとるやろ！」

「とにかく！三重塔へいくで！」

と言いながら和葉は三重塔の方へ歩き出した。

「ちょー待ち！和葉！」

と言いながら平次は和葉の後を追って行った。

ふたたび少年探偵団

「次の文は…金の鹿と漆の寺へ行けですよね…。」

「漆って？」

と歩美が聞くと光彦は人差し指を立てて

「漆って言うのは植物からとれる赤色の塗料の事ですよ！」

と説明した。

「金色の鹿ですか…京都にそんなのがいるところ…。」

「そういえば金閣寺って本当は鹿苑寺って言うよね…。」

と蘭が言くと光彦が

「わかりました！この暗号は金閣寺へ行けって言ってるんですよ！」

と光彦が言くと蘭が

「確かに金色と鹿って言う字は出てきたけど漆の字はないよ？」

と言うと光彦は得意そうに

「その昔律令制の時この字を使って苑地えんちと呼ばれる場所が口分田のほかに漆などを作るために分け与えられたんですよ！」

と言った。

「じゃあ金閣寺に行ってみようか！」

と蘭が言くと三人は

「おー！」

と言い金閣寺へ向かった。

そのころ…

眠りの小五郎こと毛利探偵は京都市内のある場所にいた。

「高き舞台って言うのは舞妓さんが踊っている舞台に違いな！他に誰もいねーし俺が一番だ！」

と言った後にいつも通り高笑いをしていた。

第14話 滝と塔（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第15話 金色の鹿

京都 金閣寺（鹿苑寺） 入口

「着きましたね！金閣寺！」

「そうだね…でも、どこに行けばいいのかな？これも言葉の意味とか調べればわかるのかな？」

と歩美が首をかしげると光彦は

「とりあえず中に入りましょう！」

と言つと中に入つて行つた。

京都 金閣寺 金閣前

「ここがよく写真で見る場所だね！」

と歩美が言つと光彦は

「ええ…ここが金閣寺の池です！でも雨乞いとか書いてあつたから、池だと思つたんですけど…」

と言いながら周りを見回したがさっきいたような人はいない。

「ここじゃないんでしょうか…」

と光彦が落ち込んでいると蘭が

「そつていえばこの上の方にある安民沢っていう場所です。でも、雨乞いからって雨乞いの場所にされてたつて話、聞いたことがあるよ…。」

と言つと光彦は

「本当ですか！」

と元気を取り戻した。

「さつそく行こうか！」

と言つと歩美は歩き出した。

京都 金閣寺 安民池

「おめでとう！君たちは現在一位だ！」

と言いながらそこにいた男の人にカードを渡された。

「やりましたね！」

「それにしても和葉ちゃんたち何やってるんだろっ…。」

その頃平次と和葉は…

京都 バス車内

「もー平次が遅いから蘭ちゃんたちに負けてももったやろ…。」

「和葉がさっさと行っつてもうたからやろ！」

「そうやけど…。」

（まっ工藤はいないんやし、あのガキどもや毛利のこの姉ちゃんに負けるわけないやろ…）

と考えていると和葉が

「なあ平次…蘭ちゃんから、聞いたんやけどあの子たちコナン君がないのに事件に巻き込まれたらしいで…。」

と言った。

「ほんまかいな！あの坊主と一緒になくて事件に巻き込まれたんかい！」

「ほんまらしいんや…それでな蘭ちゃんに頼まれたことがあるねんけど…。」

「頼まれたことってなんや？」

と平次が聞くと和葉は少し間をおいてから

「それがな…。」

と話し出した。

和葉の話が終わるとバスはちょうど金閣寺に着いた。平次は携帯を取り出してどこかに電話をかけ始めた。

ふたたび少年探偵団

「さてと…今度の文章は銀色の慈悲に照らされ石の上で座禅せよ。ですか…。」

と光彦が言つと歩美は地図を広げ

「多分さっきみたいにお寺の名前じゃない？」
と言いながら地図を見た。

五分後：

「あっ！ここ！」

と言いながら歩美は銀閣寺を指した。

「銀閣寺ですか？」

と光彦が聞くと歩美は

「ほら、慈照寺って書いてあるもん！」

と言つと光彦は

「本当ですね！それじゃあ銀閣寺へ行きましょう！」
と言つとバス停の方へ歩き出した。

第15話金色の鹿（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第16話 銀色の慈悲に照らされて

京都 金閣寺 入口付近

平次が電話を終えてその内容を和葉に話すと

「そんな…何とかならんかいな？」

と言った。すると平次は

「無理なもんは無理や…内容が内容やしな…。」

と言った。

「とにかくもう一度頼んでみ！」

と和葉が言っていると平次は

「大変やったんやで…あの姉ちゃんに頼まれた内容の三分の一ぐらいで限界や！これ以上は無理や！」

と言った。

「じゃあどないするの！蘭ちゃんになんて言えば…」

と和葉が言ったとき

「あっ！和葉ちゃんに服部君。」

と言いながら蘭と少年探偵団が近づいてきた。蘭は探偵団の三人に先にバス停に行っているよう促すと

「それで…あの件どうなったかな…。」

と言った。二人が黙っていると

「ダメだったんならダメでいいよ…。」

と蘭が言った。

「いやな…蘭ちゃん一応ダメってことはなかったんねんけど…」

「頼まれたことの三分の一くらいやないと無理なんや…。」

「つまりどう言うこと？」

と蘭が聞くと平次は先ほどの電話の内容を説明した。

「わかったわ…ありがとう服部君…。」

と言うと蘭は先ほど探偵団の三人が向かった方へ走って行った。

和葉は蘭が走り去る姿を見ながら

「それにしてもあれでええんやろうか…。」
とつぶやいた。

「どちらにせよ最後は本人が決めることや…。」

「そうやな…。」

と和葉が言つと二人は金閣寺に入つて行つた。

京都 市バス車内

「蘭お姉さん…さっき平次お兄さんと何を話していたの？」
と歩美に聞かれ蘭は

「ちよつとね…そうだ、歩美ちゃん後で大事な話があるんだけどいいかな？」

と言つた。

「うん！いいけど…何で私だけなの？元太君や光彦君は？」

「歩美ちゃんだけとかそういうのじゃなくて三人にそれぞれ話を聞きたいのよ…でも、二人に私が話したことは話しちゃいけないし、何を話していたか聞き出そうとしちゃだめよ…わかつた？」

と蘭が言つと歩美は静かにうなずいた。それを確認すると蘭は元太と光彦にそれぞれ話しかけていた。

銀閣寺 入口

「さてと…着きましたね…。」

と光彦が言つと歩美は

「ところで石の上で座禅せよっていうのはたぶん今までのかんじからどこか場所を表しているんだようけど…。」

と言つた。

「歩美ちゃんの言う通りですね！さっそく案内図を見てみましょう！」

と言いながら光彦が案内図を見ると蘭が

「あれじゃないかな？」

と言いながら地図の「座禅石」

と書かれたところを指差した。

「きつとそこですよ！行きましょー！」

と光彦が言いながら歩き出すと三人はそれに続いた。

第16話 銀色の慈悲に照らされて（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第17話 土佐の助け

京都 銀閣寺 座禅石前

歩美と元太、光彦、蘭の四人が座禅石の前に行くと言った男の人が

「すごいね！まだ君たちが一番だ！この調子で最後まで頑張ってるね！」

と言った。

「やりましたね！それで…たしか…最後は…土佐の助けを借りて大政奉還を実現せよ…でしたよね…」

と光彦が言っていると蘭は

「大政奉還っていえば二条城だけ…」
と言った。

「それじゃあ二条城に行ってみよう！」

と歩美が言っていると元太は

「待ってくれよ…俺もう腹ペコで死にそうなんだけど…」
と言った。

「もう！元太君たら…」

と歩美が言っていると蘭は

「でもさ…そろそろ休憩しない？」

と提案した。すると光彦は

「そうですね…とりあえずいったん休憩しましょうか…僕たちが一番みたいですし！それに腹が減っては戦はできないですからね！」

と賛成した。歩美も

「みんながそういうなら…」

と賛成した。

「どこ行く？」

「俺はうな重がいい！」

「元太君…それは高すぎですよ…」

などと三人が会話しているのも見て歩美は

「ウサギさんみたいにならないといいけど…。」
とつぶやきながら歩いていた。

京都 二条城 本丸御殿付近

二条城に四人が来ると先に到着していた平次に

「残念やったなー銀閣寺まではお前らが一位やったのになーこれじやあまるで、余裕かましてて負けたウサギみたいやな!」

と言われた。その横で和葉が

「ちょー平次…言いすぎやで…。」

と注意している。すると歩美は

「それじゃあ平次お兄さんたちはカメさんみたいに足が遅いの?」

と聞いた。それに対し和葉は

「いやな…歩美ちゃん…これはたとえやたとえ…ほんまにそうとかじゃないで…。」

と答えた。

そのあとコナンがいないためまともに暗号が解けなかった小五郎は結局日が暮れても帰ってこず番組は終了した。

その夜…

京都市内 ホテル付近 喫茶店

蘭は番組が終わって小五郎を探し舞妓さんに見とれているのも発見してから少し説教をしてそのあとに探偵団のメンバーを光彦、元太、歩美の順に呼んだ。

円谷光彦

蘭は光彦へ簡単に説明を始めた。

「…っていうことなんだけど…どうかな?」

と蘭が説明を終えると光彦は

「そうですね…それはいいと思いますけど…僕はこのままでいいと

思いますよ…蘭さんが言った通りになるとは限りませんし…話はそれだけですか？」

と言った。すると蘭は

「うん…でもまた意見聞かせてくれる？」

と言った。それに対し光彦は

「もちろんですよ！それじゃあ元太君呼んできますね！」

と言うと光彦は元太を呼びに行った。

元太の話も光彦と同じように展開し次は歩美の番になった。

吉田歩美

歩美が席に座ると蘭は

「歩美ちゃんを一番最後にしたのは…歩美ちゃんへの話が一番大事だからだけど…実はねコナン君が転校した後に歩美ちゃんたちが事件に遭遇したって時から考えていたことなんだけど…」

と話を始めた。その話が終わると歩美は

「…わかった…でも少し考えていい？」

と聞いた。すると蘭は

「うん…こんなこといきなり言われて驚いたかもしれないけど…ダメならダメって言っていていいからね…話はこれだけよ…」

と答えた。

第17話土佐の助け（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章突入です。新章では劇場版を参考に書きたいと思います。

これからもよろしくお願いします。

第18話止まらない電車

京都での番組の収録を終えた歩美、元太、光彦、蘭、平次、和葉、小五郎の七人は京都で一泊したのち依頼があるため先に帰った小五郎以外大阪に来ていた。

大阪駅に着くと和葉は

「せや！京都で蘭ちゃんから話聞いてると思うねんけど…今日は平次と歩美ちゃんの二人で行動して残りの私たちは一緒に大阪見物や！それじゃ行くで！ところで三人はそれでええよな？」

と探偵団の三人を見ながら言った。三人が

「俺は別にいいぜ！」

「私も…。」

「歩美ちゃんがそういうのなら僕も別にいいですよ…。」

とそれぞれ答えると和葉は

「それなら大阪見物出発や！まずは大阪城や！」

と言い五人は通天閣へ向かった。

大阪 西坂環状線電車内

大阪の街の中を疾走する電車の車窓を元太と光彦は興味津々にみている。

「なあ…蘭ちゃん…。」

と和葉が話しかけると蘭は

「どうしたの？」

と聞いた。

「何であんなこと頼んだん？」

と和葉が言つと蘭は

「それはね…。」

と答え始めた。

和葉は蘭の説明を聞くと

「そうなんや…。」

と言った。

「それで！平次にはそれ話すんかいな？」

と和葉が聞くと蘭は

「それは…ちゃんと話ができてからの方がいいかなって…歩美ちゃんなんていうかもまだ、わからないしそれにそう急ぐことでもないから…。」

と答えた。

「せやけど…。」

と和葉が答えると光彦が

「おかしくありませんか？」

と言った。蘭が

「えっ！さっきの話聞いてたの？」

と聞くと光彦は

「話？いえ…そうじゃなくて…さっきまでこの電車減速してたのに今は加速している気がしたもんですから…。」

と言った。すると

「お客様にお知らせいたします。この電車は緊急事態の発生に伴い次の公園前を通過いたします。お客様に大変ご迷惑をおかけしますが列車が停止した駅でお降りください。」

という車内アナウンスが流れた。

「緊急事態って何があったんや…。」

と和葉がつぶやくと蘭が

「本当だね…でも次の駅で止まるんじゃない？」
と言った。

午前9時45分

大阪 西坂環状線 公園前駅ホーム

「お客様にお知らせいたします。緊急事態の発生に伴い次の西坂環状線新快速新王寺行きは当駅を通過いたします。白線の内側までお下がりください。なお次に参ります西坂環状線大阪行きの電車も当駅を通過いたします。お客様には大変ご迷惑をおかけいたしますが次の電車到着までしばらくお待ちください…。」

というアナウンスが流れ公園前駅の両ホームを電車が通過していく。

午前10時00分

大阪 西坂環状線電車内

公園前を通過した電車は終着駅である新王寺駅も通過し現在もノンストップで西坂環状線を走行している。

「緊急事態の発生に伴い次の新今川駅しんいまがわを通過いたします。」
と車内アナウンスが流れると

「ほんまになにがあつたんや…。」

と和葉は流れる車窓を眺めながらつぶやいていた。

第18話止まらない電車（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第19話その頃平次と歩美は…

大阪 大阪駅 西坂環状線ホーム

「…ということなんや…。」

と平次がざつと事情を説明すると歩美は

「そうなんだ…でもそれだと…。」

と言った。

「まあ今すぐには言わへんからとりあえず和葉たちと合流しようや！」

と言ったとき平次の携帯が着信を告げた。

「大滝ハンから…なんやろ…。」

と言いながら電話に出ると平次は真剣な表情で話を聞き時計を見た。

「9時40分か…とりあえずそっちへ行くさかい大阪駅まで迎えに来てくれへんか？」

と言った。

大阪駅 入口

「待つとつたで！大滝ハン！」

と平次が言つと大滝刑事は

「とりあえず平ちゃん早よ乗って！」

と言い平次と歩美を車に乗せた。

「それで…その爆破予告とかいうのはどんなのなんや？」

と平次が聞くと大滝刑事は

「さっき電話大阪府警に來た爆破予告がこれなんやけど…。」

と言いながら紙を渡そうとしたが平次の携帯が鳴ったため平次が電話に出た。平次は少し話を聞くと携帯の電話の内容が皆に聞こえるようにした。すると電話の相手は

「大阪府警と今電話に出ている高校生探偵に告ぐ。TR西の西坂環状線に爆弾を仕掛けた。この爆弾は午前9時45分以降時速50？

以下で走行するか午後5時30分までに解除できないと爆発する仕掛けになっている。貴様らの健闘を祈る。」

と言うと電話を切った。

「これって爆破予告？」

と歩美が聞くと大滝刑事は

「そうや…さっき大阪府警にも同じ内容の電話が来たんや…とりあえずTR西の総合指令所にはさっき連絡入れといたわ…。」

と答えた。すると平次は

「とりあえず俺らも総合指令所へ行くで！」
と言った。

午前9時42分

大阪 TR西総合指令所

「中村指令長^{なかむら}…大阪府警から緊急連絡だ！」

と言いながら司令室に広川^{ひろがわ}運行部長が入ってきた。

「緊急連絡と言いますと？」

と中村指令長が聞くと広川部長は

「西坂環状線に爆弾が仕掛けられた。」

と言った。中村指令長が

「それじゃあ全列車を止めて緊急点検を…」

と言いだしたが広川部長は

「駄目だ…この爆弾は午前9時45分になってから時速50？未満で走行すると爆発する仕掛けだ！」

と言った。すると中村指令長は

「9時45分ってあと3分もないですよ！」

と言うと広川部長は

「とにかく！今すぐすべての列車を時速50？…いや…60？で走行させる！」

と広川部長が言った。

「すべてですか！停車中の列車は？」

「今すぐ発車だ！」

「停車しようとしているものは？」

「通過だ！とにかく環状線の電車をノンストップで走行させるのと同時に環状線に乗り入れている周辺各路線に連絡し環状線に近づいている電車をすべて引き返させる！今すぐにだ！」

と広川部長が言々と中村指令長は

「はい！」

と答えてマイクのところへ行き

「緊急指令！緊急指令！西坂環状線を走行中の全車両および環状線に向かっている車両に告ぐ！西坂環状線に何者かによって爆弾が仕掛けられた。この爆弾は時速50？以下で走行すると爆発する。全車両時速60？以上で走行せよ！なお環状線に向かっている車両はその場で停止せよ！」
と言った。

第19話その頃平次と歩美は…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第20話TR西総合指令室

午前10時10分

TR西総合指令室

「環状線に向かった電車を止めた？何を考えてるんや！その電車は爆弾なかったからええけどもし爆弾が仕掛けられとったらえらいこっちゃぞ！」

と平次が言つと中村指令長は

「はい…すみません…その…。」

と言つた。

「まあ…ええ…とりあえず爆弾探すで…。」

と平次が言つと歩美は

「ところでさ…爆弾って本当にあるのかな？」

と言つた。すると中村指令長は

「まあ…あるとは確かに言い切れませんが…。」

と言いながら歩美を見て

「何で小学生がここにいますか！」

と言つた。

「そんなことはええとして爆弾探さな！」

と平次が言つと中村指令長は

「今車内を確認させてますが…まだ発見はできてません…。」

と答えた。

「車両の下は？」

「沿線にカメラを設置し全車両確認中です。」

と中村指令長が答えると平次は

「見つかると思えけどな…。」

と言つた。

午前12時45分

大阪 某所

「ご覧ください！現在もこの映像を撮影しているヘリコプターの下
あの西坂環状線が3時間も走行し続けています。なおこの事態に
ついて大阪府警とT R西はただ緊急事態が発生したとだけしか説明
していません。」

というような内容の報道を見ていた茶髪の少女が黒髪のメガネをか
けた少年に

「ねえ…これってやっぱり…。」

と言うと少年は

「やっぱりってなんや…。」

と答えた。

「なんやってテレビ見てるやろうが！なんか事件やないのか？」
と少女が言うつと少年は

「あのなあ…茶髪…電車が止まらんくなるって事件やのーて事故や
ないのか？」

と言った。

「なにゆーとるのや！天才！よー考えてみ…たとえば…爆弾とか…。」

と茶髪が言うつと天才は

「そんなことそうそうないで！そんな危なかったら探偵団なんてや
られへんわ…。」

と答えた。すると天才の母が

「香菜かなえ絵ちゃん！お母さんから電話よ！」

と言った。すると茶髪は

「はい！」

と答えて電話に出た。

午後12時55分

T R西総合指令室

「爆弾がないやって！」

と平次が言つと中村指令長は

「はい…車内と列車の下、さらには車体の上を確認しましたがまったく…。」

と答えた。

「やっぱり爆弾はないのでは？」

と中村指令長が言つと平次の携帯が着信を告げた平次が

「もしもし…。」

と出ると電話の相手は

「爆弾を探すのに手間取っているようだな…。」

と言つた。平次が

「爆弾なんて本当にあるんかい？」

と聞くと相手は

「信じないならデモストレーションを見せてやる…ちょうど列車を撮影している報道のカメラがあるな…西坂テレビの映像を試してみろ。」

と言つた。平次が

「なんかテレビ見れるか？」

と聞くと中村運転指令長は

「一応この携帯はワンセグです…。」

と言いながら携帯を出した。

第20話TR西総合指令室（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第21話爆弾の真相

午後1時07分

TR西総合指令室

「いきなりテレビを見るなんて何考えてるんや…。」

と言いながら平次がチャンネルを西坂テレビに合わせると

「先ほどこの騒ぎの原因を作った男を名乗る人物から現在生中継で列車を映しているカメラで近くにある河原を映せとの電話が…」

とアナウンサーが言った瞬間カメラに映っていた小屋が爆発した。

「小屋が爆発しました！画面に映った小屋が突然爆発しました！」

この映像を見ていた歩美は

「本当にあつたんだ…爆弾…。」

とつぶやいていた。

午後1時08分

西坂環状線車内

「ほんまに止まらへんな…この電車…。」

と和葉がつぶやく。かれこれ3時間以上走行し続けているため車内は混乱していた。その時鉄橋を渡っているときに突然河原に立っていた小屋が爆発した。

「なんだあれ！」

と元太が言うと光彦は

「爆発しましたよ！」

と言っている。ただでさえ混乱していた車内が余計混乱している。

車掌は車内放送のマイクをつかむと

「皆様落ち着いてください！落ち着いて！」

と必死に言っている。

午後1時10分

大阪 天才の家

香菜絵が電話を終えて戻ると天才が

「茶髪…お前が言ってたこと間違ってたよやで…」

と言った。香菜絵がテレビの画面を見ると環状線沿線の小屋が爆発したとアナウンサーが伝えている。

「ほんまやな…えらいこっちゃ…」

と香菜絵が言くと天才は

「とにかく…これで列車にも爆弾がある可能性が出てきたな…」
とつぶやいた。

午後1時12分

TR西総合指令室

「しっかし…爆弾はどこにあるんや…」

と平次が言くと歩美は

「そういえば東都環状線の時って…」

とつぶやいた。平次が

「東都環状線の時ってなんや？」

と聞いた。すると歩美は

「いやね…コナン君から聞いたんだけど…確か東都環状線で爆破予告があつた時に爆弾が線路の上にあつて何秒間か光が当たらないと爆発するってやつだったけど…関係ないかな…」

と言った。すると平次は

「いや…待てよ…車両のどこにも仕掛けられていないんならその可能性もあるで！」

と言った。すると広川部長は

「そうだとすればどうするんです？」

と聞いた。すると平次は

「だったら話は簡単や西坂環状線はぎょーさんいろんな線路と繋がつとるからな…環状線の電車をほかの線に移せばええんや…」
と言った。すると広川部長は

「今から2分後に12番列車を貨物線に引き入れだ！」
と言った。

「12番列車…12番列車…こちらは運転指令…今から2分後に貨物線へポイントを切り替える。貨物線へ入り次第減速せよ！」
と司令員が指示を出した。

「ところで…広川運行部長はどこに行ってたの？」
と歩美が聞くと平次が

「こんな時なのに娘さんと電話やと…。」
と答えた。

午後1時15分

西坂環状線某所

12番列車の前を走る電車が通過するとポイントが切り替わった。
12番列車はポイントを曲がりすべての車両が貨物線内に入ると速度を落とし始めた。

第21話爆弾の真相（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6386u/>

米花町より

2011年11月8日10時10分発行